

ジェンダーをテーマにした授業の実践研究

足利市立毛野中学校 中池 さな恵

1 本研究の目的

筆者は自分が学生という身分の時までは学校という世界の中においては男女差別について特に強く意識することなく生きてきた。男女差別について強く意識するようになったのは就職してからである。教員になってから「女」という理由で不当な扱いを受けていると感じる場面に遭遇し、男女差別を自らにふりかかっている問題としてとらえるようになった。自分を取り巻く環境をもっと居心地のよいものに変えていくと同時に教師として、次世代を担う生徒たちにジェンダーにとらわれずに自分らしく生きられる社会をつくっていく力をつけさせたいと考えた。生徒たちもほとんどが「女だから、男だから、こうあるべき。それが当然。常識。」とジェンダーにもとづいて区分された社会の中でそうした考えを植え付けられ育ってきたものと思われる。その「常識」に揺さぶりをかけ、固定的な性役割にとらわれずに「自分らしく」生きることの意義、今まで当然とされていたものに疑問をもち、変えるべきものは変えていくことの意義に気付けるような授業を実践すること、また、男女混合名簿への変更が生徒の意識にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることによって、男女別男子優先名簿の差別性から名簿問題が些細な問題ではないことを実証することが本研究の目的である。アンケート調査から生徒の意識の変容を分析し、本実践の有効性を検証する。

2 実践の概要

筆者の前任校である坂西中学校では平成10年度の職員会議の結果、賛成16、反対12で、平成11年度から男女別名簿から男女混合名簿に変更することになった。まず、生徒に学校生活の中で男女の不平等を感じたことはないか、男女別男子優先名簿は男女差別につながると思うかについてのアンケートをとり、生徒の意識調査を行った。当時、足利市内の中学校で既に男女混合名簿に変更されていたのは2校（平成9年度から第一中学校、平成10年度から第二中学校）でこの2校の事例を参考にしながら、平成10年度に次年度男女混合名簿に変更することについて生徒への説明と啓発のための授業が行われた。このときの3年生は実際には混合名簿を使用することはなかったが、公民の授業で混合名簿を切り口にして一連の授業を展開していった。この授業を平成11年度の1年生にも展開した。授業を行った時期には平成11年度の1年生は中学校に入学し、混合名簿を経験して約1年経過しており（4校の出身小学校のうち1校は生徒が6年生のときに混合名簿に変更している）、混合名簿に対する違和感は平成10年度の3年生よりもないものと考えられる。平成12年度は筆者が転勤になったため、現任校の1年生でこの授業を展開し、その後平成15年3月の卒業に至るまで生徒の様子を観察した。平成12年度の1年生は小学校（2校）の途中で混合名簿になったとのことであった。授業はすべてその学年で学習すべき範囲が終わった後、その学年度の最後に特設社会科として展開した。

(1) 対象、日程

坂西中学校	平成10年度3年生	225名（6クラス）	平成11年2月実施
坂西中学校	平成11年度1年生	224名（6クラス）	平成12年3月実施
毛野中学校	平成12年度1年生	143名（4クラス）	平成13年3月実施

(2) 目標

関心・意欲・態度

- ・今まで、当たり前と思われてきたことに対して、疑問を持ちよく考えてみることの大切さに気づく。
- ・些細な（小さな）ことの積み重ねが差別意識を育てていく危険性があることに気づく。
- ・男女平等の問題について関心を持つ。

思考・判断

- ・「自分らしく生きるとはどういうことか」について考えることができる。
- ・女性と男性が共に協力し合い、幸せに生きるための社会を実現させていくためにはどうしたらよいか考えることができる。

技能・表現

- ・男女平等に関するアンケート結果から、同学年の生徒の意識を知り、それが何を意味しているか考えることができる。
- ・「男女平等の資料」から、男女の役割分業意識が男女平等を実現する上で大きな障害になっていることがわかる。

知識・理解

- ・女子差別撤廃条約の趣旨と1985年にこの条約を結んだ後の日本の動きについておおまかに理解する。
- ・ジェンダーフリーの考えについて理解する。
- ・男女混合名簿に変更される（た）意味について理解する。

(3) 授業の流れ

前時 事前アンケートを授業の後半に行い、集計をしておく。

第1～2時

女性と男性が共に協力しあい、自分らしく幸せに生きることのできる社会を作っていくためにはどうしたらよいかを考えることが大きな課題であるということを示す。事前アンケートの結果（該当クラスと学年全体のもの）を示したうえで、なぜ男女混合名簿にする必要があるのかを説明する。歴史的にみて男性優位、女性優位のどちらであったかを具体的な事例をもとに考えさせる。女の役割、男の役割と考えられてきたものにはどんなものがあるか、女らしさ、男らしさとは具体的にいうとどういうことか、「女らしく、または男らしく」生きることと、「自分らしく」生きることとは一致するかについて考えさせ、発表させる。資料からジェンダー、男女の特性と差別の関係、女子差別撤廃条約、家庭科が必修になったことの経緯、性別役割分業についての説明する。

第3時

「課外授業ようこそ先輩 田嶋陽子 女らしさ男らしさってな～に？」のビデオを見せ、感想を書かせる。

・ビデオの内容

この授業では、田嶋陽子さんが母校の小学校で、「無意識に押しつけられた男女観」を題材に授業を展開している。「将来の自分像」というテーマで子どもたちが描いた絵を通して、子どもたちの中にある男女の役割や職業に対する「思い込み」を具体例を示して教えていく。また、田嶋さん自身が母親から言われた、「女らしくしなさい」という言葉が、彼女を長い間苦しめたこと、尊敬していた先生から「女は最初はでき

るが後でだめになる」と言われ、いくら頑張っても女だからという理由で認められず悔しい思いをしたことが深い傷となり、医者になりたかった自分の夢を断念したことなど、ありのままの自分の体験を語っている。そして、子どもたちに、男性と女性は補いあうものではなく、一人一人が自立しているものであり、「わがまま」に、つまり、自分らしく、あるがままに生きることが大切であるというメッセージを子どもたちに送っている。

第4時

男女平等の社会を実現させていくためにはどうしていったらよいと思うか、この授業の感想を書かせ、社会科の四観点に基づいて自己評価をさせる。事後アンケートを書かせる。

3 生徒の意識

(1) 事前アンケートから

アンケートにより授業前の生徒の学校内外での男女差別に対する意識、男子優先の男女別名簿と男女混合名簿についての意識、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業についての意識、性別の選択に関する意識を調査した。授業後のアンケートでも、男子優先の男女別名簿の差別性と性別役割分業については同じ質問をしているので、ここでは、事前アンケートだけで事後アンケートになかった質問項目についての結果の分析を行う。

質問1 今まで、学校生活の中で男女差別だと感じたことはありますか？

ア はい

	計	男	女
H10 坂西中3年	31.0%	35.1%	25.6%
H11 坂西中1年	20.3%	18.9%	21.7%
H12 毛野中1年	17.7%	21.2%	14.7%

質問2 今まで、学校生活以外で男女差別だと感じたことはありますか？

ア はい

	計	男	女
H10 坂西中3年	33.5%	32.5%	34.9%
H11 坂西中1年	28.3%	22.6%	34.0%
H12 毛野中1年	21.3%	16.7%	25.3%

どの学年も20%前後から30%前後の生徒が男女差別を感じたことがあると答えている。若干ではあるが、学校生活以外で男女差別だと感じたことがあると答えた生徒の割合がどの学年でも高くなっている。理由の記述から、学校生活の中では、「男子と女子に対する教師の態度の違い。男子と女子の頼まれる仕事の違い（男子は力仕事、女子は手先を使う仕事）。『男なんだから～、女なんだから～。』と言われること。体育の種目。名簿の順番。」などが多く挙げられていた。学校以外の差別については「男の仕事、女の仕事が決まっていること。女性は就職しづらく、なかなか出世できず、給料が低いこと。女だからといって家の手

伝いをやらされること。男だからといって力仕事をやらされること。」などが多く挙げられていた。

質問3 小学校の時、男が先、女が後という男女別の名簿だったのが、男女混合の名簿になりましたが、どちらがよいと思いますか。

ア 男女別の名簿

	計	男	女
H11 坂西中1年	32.5%	35.8%	29.2%
H12 毛野中1年	36.2%	40.9%	32.0%

イ 男女混合の名簿

	計	男	女
H11 坂西中1年	66.0%	62.3%	69.8%
H12 毛野中1年	61.7%	59.1%	64.0%

坂西中の1年生は出身小学校4校中1校を除き中学生になってから、毛野中の1年生は小学校の途中から混合名簿になっている。両方とも60%以上の生徒が男女混合名簿のほうを支持しており、また女子の支持の割合が男子と比べて若干高くなっている。

男女別の名簿の支持理由として多かったのは「見やすい。わかりやすい。今まで男女別だったからその方が慣れていてよい。」などであった。一方、男女混合の名簿の支持理由として多かったのは「差別がなく男女平等だと思う。男女混合の方がクラスがまとまっていい。慣れていてよい。」などであった。

質問2 次に生まれてくる時は男、女のどちらに生まれてきたいですか。

ア 男

	計	男	女
H10 坂西中3年	64.0%	83.3%	38.4%
H11 坂西中1年	74.1%	95.3%	52.8%
H12 毛野中1年	62.4%	92.4%	36.0%

イ 女

	計	男	女
H10 坂西中3年	34.5%	14.0%	61.6%
H11 坂西中1年	25.9%	4.7%	47.2%
H12 毛野中1年	37.6%	7.6%	64.0%

H10 坂西中3年 男女どちらでもよいと答えた生徒、男子に3名

男女とも自分の性について肯定的な生徒の割合が高いが、女子よりも男子の方が圧倒的に自分の性に対し

て肯定的で80%～90%以上がまた男に生まれてきたいと答えている。理由の記述から男女とも、男子の方が女子より自由で差別も受ける割合が少なく、社会的にも男子の方が有利であると考えているようだ。

(2) 事前アンケートと事後アンケートの比較

ここでは、男子優先の男女別名簿の差別性と性別役割分業について、授業前と後の生徒の意識をアンケート結果から比較し考察する。

回答数

	事前			事後		
	計	男	女	計	男	女
H10 坂西中3年	182	107	75	200	114	86
H11 坂西中1年	211	105	106	212	106	106
H12 毛野中1年	136	62	74	141	66	75

質問1 今までの男が先、女が後という男女別の名簿は男女差別につながると感じますか？

ア はい

事前

	計	男	女
H10 坂西中3年	16.0%	12.3%	20.9%
H11 坂西中1年	35.8%	37.7%	34.0%
H12 毛野中1年	27.0%	19.7%	33.3%

事後

	計	男	女
H10 坂西中3年	34.6%	29.9%	41.3%
H11 坂西中1年	66.4%	64.8%	67.9%
H12 毛野中1年	47.8%	40.3%	54.1%

授業前は男女差別につながると答えた生徒の割合は最も高いH11 坂西中1年で35.8%、もっとも低いH10 坂西中3年で16.0%と、つながると答えたのは3人に1人以下であった。授業後も増加したといっても、過半数を越えたのはH11 坂西中1年の66.4%だけで、男女別の名簿は男女差別につながると考えている生徒は多数派であるとはいえない。事前アンケートと比べ、事後アンケートの方が男女差別につながると答えた生徒が倍くらいになっており、特に女子の割合の方が男子と比べて多くなっている。混合名簿を経験していないH10 坂西中3年は経験しているH11 坂西中1年、H12 毛野中1年と比べ男女差別につながると答えた生徒の割合が低い。このことから男が先、女が後という男女別の名簿は男女差別につながると考えているのは男子より女子、混合名簿を経験している生徒の方が多いといえる。

理由の記述を見ると、事前アンケートでは、「男が先、女が後というのは男が優先されている、それが差別につながる」という意見が多く、「女子、男子と分けると、そのことで、自分は女子（男子）という意識の方が強くなってしまふ。」と性別カテゴリーの影響に言及しているものもあった。事後アンケートでは、より具体的で詳しい記述がなされ「小さなことの積み重ねが男女差別につながること」、「知らず知らずに男女差別の意識を植え付けている」ことに言及しているものも多く見られ、気づきから思考が深まったものと考えられる。

質問2 「男は仕事、女は家庭」という考えについてどう思いますか？

ア 賛成

事前

	計	男	女
H10 坂西中 3 年	11.5%	15.8%	5.8%
H11 坂西中 1 年	4.7%	5.7%	3.8%
H12 毛野中 1 年	9.9%	16.7%	4.0%

事後

	計	男	女
H10 坂西中 3 年	4.4%	4.7%	4.0%
H11 坂西中 1 年	0.9%	1.9%	0.0%
H12 毛野中 1 年	4.4%	9.7%	0.0%

賛成と答えた生徒は授業前から少数であったが、授業後はさらに減少し、混合名簿を経験している H11 坂西中 1 年と H12 毛野中 1 年の女子では 0.0% となっている。

イ どちらかといえば賛成

事前

	計	男	女
H10 坂西中 3 年	27.5%	31.6%	22.1%
H11 坂西中 1 年	31.1%	39.6%	22.6%
H12 毛野中 1 年	30.5%	45.5%	17.3%

事後

	計	男	女
H10 坂西中 3 年	7.7%	11.2%	2.7%
H11 坂西中 1 年	7.1%	10.5%	3.8%
H12 毛野中 1 年	9.6%	16.1%	4.1%

事前、事後とも肯定派は女子より男子の方が多くなっている。事前はどの学年も30%前後が肯定していたが、事後は10%未満となっている。事前は4つの選択肢の中で男子の支持の割合が一番高くなっている。

ウ どちらかといえば反対

事前

	計	男	女
H10 坂西中3年	34.5%	32.5%	37.2%
H11 坂西中1年	38.2%	34.9%	41.5%
H12 毛野中1年	37.6%	24.2%	49.3%

事後

	計	男	女
H10 坂西中3年	42.9%	46.7%	37.3%
H11 坂西中1年	42.7%	50.5%	34.9%
H12 毛野中1年	36.8%	41.9%	32.4%

事前は男子より女子の方が多くなっているが、事後は女子より男子の方が多くなっている。事前に女子の支持の割合が一番高く、事後、男子の支持の割合が一番高くなっている。

エ 反対

事前

	計	男	女
H10 坂西中3年	26.5%	20.2%	34.9%
H11 坂西中1年	25.9%	19.8%	32.1%
H12 毛野中1年	22.0%	13.6%	29.3%

事後

	計	男	女
H10 坂西中3年	45.1%	37.4%	56.0%
H11 坂西中1年	49.3%	37.1%	61.3%
H12 毛野中1年	49.3%	32.3%	63.5%

事前、事後とも反対だと答えたのは男子より女子の方が多くなっている。事前はどの学年も25%前後が肯定していたが、事後は50%近くとなっている。事後、女子の支持の割合がどの学年も60%前後となっており、4つの選択肢の中で一番高くなっている。

ア+イ 賛成、どちらかといえば賛成

事前

	計	男	女
H10 坂西中 3 年	39.0%	47.4%	27.9%
H11 坂西中 1 年	35.8%	45.3%	26.4%
H12 毛野中 1 年	40.4%	62.2%	21.3%

事後

	計	男	女
H10 坂西中 3 年	12.1%	15.9%	6.7%
H11 坂西中 1 年	8.0%	12.4%	3.8%
H12 毛野中 1 年	14.0%	25.8%	4.1%

事前は40%近くが支持していたが、事後にはだいたい10%前後に減少している。女子より男子の支持の割合の方が坂西中の生徒では約10%、毛野中の生徒では約20%高くなっている。支持の理由として、「今までそうだったから。男の特徴、女の特徴を生かした仕事である。子どもがいるなら女は家庭にいた方がいい。」などを挙げている。現状に慣らされ、それを当然のこととして肯定的に受け入れている姿勢が見られる。

ウ+エ 反対、どちらかといえば反対

事前

	計	男	女
H10 坂西中 3 年	61.0%	52.7%	72.1%
H11 坂西中 1 年	64.1%	54.7%	73.6%
H12 毛野中 1 年	59.6%	37.8%	78.6%

事後

	計	男	女
H10 坂西中 3 年	88.0%	84.1%	93.3%
H11 坂西中 1 年	92.0%	87.6%	96.2%
H12 毛野中 1 年	86.1%	74.2%	95.9%

事前も60%前後が支持していたが、事後にはだいたい90%が支持している。男子より女子の支持の割合の方が坂西中の生徒では約10%、毛野中の生徒では約20%高くなっている。男子と女子を比べると女子では反対、どちらかといえば反対の割合が圧倒的に高くなっており、「男は仕事、女は家庭」という考えは特に女子にはほとんど支持されていないことがわかる。反対、どちらかといえば反対の主な理由として、「男は仕事、女は家庭と、自分の人生を縛られて生きていたくないから。自分の好きなことをやればいいから。『男は仕事、女は家庭』だと『自分らしさ』がなくなると思う。両方が両方をやるのが当たり前という

考えの方がいいと思うから。男女差別になるから。自分の個性を生かして仕事や家事をやればいい。今は共働きが多いのでこの考えは間違っていると思う。」などが挙げられる。

事前で男子の支持の割合が一番高かったのは、「どちらかといえば賛成」で、女子の支持の割合が一番高かったのは、「どちらかといえば反対」であったが、事後は男子の支持の割合が一番高かったのは、「どちらかといえば反対」で、女子の支持の割合が一番高かったのは、「反対」となっており、授業前後で反対の方に一段階ずつシフトしている。この結果から性別役割分業については男子より女子の方が否定的であると言える。

(3) 自己評価

ジェンダーをテーマにした授業の観点別目標について生徒に自己評価させた結果は以下の通りである。

回答数	H10年度坂西中3年生	計	177	男	107	女	70
	H11年度坂西中1年生	計	211	男	105	女	106
	H12年度毛野中1年生	計	136	男	62	女	74

◎観点別目標の自己評価 (◎よくできた ○だいたいできた △あまりできなかった)

関心・意欲・態度

・今まで、当たり前と思われてきたことに対して、疑問を持ちよく考えてみることの大切さに気づく。

	計			男			女		
	◎	○	△	◎	○	△	◎	○	△
H10 坂西中3年	49.7%	47.5%	2.8%	43.9%	52.3%	3.7%	58.6%	40.0%	1.4%
H11 坂西中1年	49.8%	46.4%	3.8%	42.9%	51.4%	5.7%	56.6%	41.5%	1.9%
H12 毛野中1年	36.0%	54.4%	9.6%	22.6%	64.5%	12.9%	47.3%	45.9%	6.8%

・些細な（小さな）ことの積み重ねが差別意識を育てていく危険性があることに気づく。

	計			男			女		
	◎	○	△	◎	○	△	◎	○	△
H10 坂西中3年	29.4%	62.7%	7.9%	25.2%	65.4%	9.3%	35.7%	58.6%	5.7%
H11 坂西中1年	46.9%	44.1%	9.0%	41.0%	51.4%	7.6%	52.8%	36.8%	10.4%
H12 毛野中1年	44.1%	48.5%	7.4%	48.4%	41.9%	9.7%	40.5%	54.1%	5.4%

- ・男女平等の問題について関心を持つ。

	計			男			女		
	◎	○	△	◎	○	△	◎	○	△
H10 坂西中3年	46.9%	47.5%	5.6%	46.7%	44.9%	8.4%	47.1%	51.4%	1.4%
H11 坂西中1年	51.2%	44.1%	6.6%	41.9%	45.7%	12.4%	60.4%	42.5%	0.9%
H12 毛野中1年	57.4%	32.4%	11.0%	46.8%	33.9%	19.4%	66.2%	31.1%	4.1%

思考・判断

- ・「自分らしく生きるとはどういうことか」について考えることができる。

	計			男			女		
	◎	○	△	◎	○	△	◎	○	△
H10 坂西中3年	46.3%	44.6%	9.0%	39.3%	50.5%	10.3%	57.1%	35.7%	7.1%
H11 坂西中1年	39.8%	47.4%	12.8%	27.6%	54.3%	18.1%	51.9%	40.6%	7.5%
H12 毛野中1年	41.2%	49.3%	9.6%	41.9%	41.9%	16.1%	40.5%	55.4%	4.1%

- ・女性と男性が共に協力し合い、幸せに生きるための社会を実現させていくためにはどうしたらよいか考えることができる。

	計			男			女		
	◎	○	△	◎	○	△	◎	○	△
H10 坂西中3年	29.4%	55.9%	14.7%	29.0%	54.2%	16.8%	30.0%	58.6%	11.4%
H11 坂西中1年	26.1%	54.5%	19.4%	18.1%	60.0%	21.9%	34.0%	49.1%	17.0%
H12 毛野中1年	23.5%	61.8%	14.7%	24.2%	62.9%	12.9%	23.0%	60.8%	16.2%

技能・表現

- ・男女平等に関するアンケート結果から、同学年の生徒の意識を知り、それが何を意味しているか考えることができる。

	計			男			女		
	◎	○	△	◎	○	△	◎	○	△
H10 坂西中3年	28.8%	57.1%	14.1%	28.0%	60.7%	11.2%	30.0%	51.4%	18.6%
H11 坂西中1年	25.1%	56.4%	18.5%	28.6%	52.4%	19.0%	21.7%	60.4%	17.9%
H12 毛野中1年	27.9%	55.9%	17.6%	27.4%	43.5%	29.0%	28.4%	66.2%	8.1%

- ・「男女平等の資料」から、固定的性別役割分業意識が男女平等を実現する上で大きな障害になっていることがわかる。

	計			男			女		
	◎	○	△	◎	○	△	◎	○	△
H10 坂西中 3年	23.2%	65.5%	11.3%	23.4%	61.7%	15.0%	22.9%	71.4%	5.7%
H11 坂西中 1年	48.3%	40.3%	11.4%	45.7%	41.0%	13.3%	50.9%	39.6%	9.4%
H12 毛野中 1年	53.7%	36.0%	10.3%	41.9%	41.9%	16.1%	63.5%	31.1%	5.4%

知識・理解

- ・女子差別撤廃条約の趣旨と1985年にこの条約を批准後の日本の動きについておおまかに理解する。

	計			男			女		
	◎	○	△	◎	○	△	◎	○	△
H10 坂西中 3年	10.2%	66.1%	23.7%	12.1%	62.6%	25.2%	7.1%	71.4%	21.4%
H11 坂西中 1年	8.5%	61.6%	29.9%	11.4%	55.2%	33.3%	5.7%	67.9%	26.4%
H12 毛野中 1年	23.5%	48.5%	28.7%	17.7%	48.4%	35.5%	28.4%	48.6%	23.0%

- ・ジェンダーフリーの考えについて理解する。

	計			男			女		
	◎	○	△	◎	○	△	◎	○	△
H10 坂西中 3年	15.8%	65.0%	19.2%	19.6%	57.9%	22.4%	10.0%	75.7%	14.3%
H11 坂西中 1年	18.5%	53.1%	28.4%	19.0%	57.1%	23.8%	17.9%	49.1%	33.0%
H12 毛野中 1年	22.8%	56.6%	22.8%	21.0%	50.0%	30.6%	24.3%	62.2%	16.2%

- ・男女混合名簿に変更される(た)意味について理解する。

	計			男			女		
	◎	○	△	◎	○	△	◎	○	△
H10 坂西中 3年	31.1%	55.9%	13.0%	30.8%	55.1%	14.0%	31.4%	57.1%	11.4%
H11 坂西中 1年	46.9%	45.0%	8.1%	43.8%	43.8%	12.4%	50.0%	46.2%	3.8%
H12 毛野中 1年	38.2%	55.1%	7.4%	35.5%	54.8%	9.7%	40.5%	55.4%	5.4%

関心・意欲・態度の目標の3つに関しては「あまりできなかった」と答えた生徒の割合が「男女平等の問題について関心を持つ。」の目標でのH12毛野中1年の11.0%を除いては10%未満で、「よくできた」と答えた生徒の割合も他の観点と比べ高い割合となっており、本実践がねらいに迫ることができたと考えられる。

どの項目についても全体的に「あまりできなかった」と答えた生徒の割合は女子より男子の方が多い。

「今まで、当たり前と思われてきたことに対して、疑問を持ちよく考えてみることの大切さに気づく。」という目標については、どの学年も男子より女子の方が「よくできた」と答えた生徒の割合が約15%から約

25%高く、「あまりできなかった」と答えた生徒の割合は女子は男子の3分の1から2分の1であった。

「些細な（小さな）ことの積み重ねが差別意識を育てていく危険性があることに気づく。」と『男女平等の資料』から、固定的性別役割分業意識が男女平等を実現する上で大きな障害になっていることがわかる。」と「男女混合名簿に変更される（た）意味について理解する。」という目標については、平成10年度坂西中3年生の「よくできた」と答えた生徒の割合が他の学年と比べて低くなっている。学年の発達段階から考えると、3年生がどの項目も「よくできた」と答える割合が高いと予想していたが、男女混合名簿も経験しておらず、ジェンダーについて意識してあまり考えることなく生活してきた年数が1年生よりも長く、よりジェンダーにとらわれていることも考えられる。

「女子差別撤廃条約の趣旨と1985年にこの条約を批准後の日本の動きについておおまかに理解する。」と「ジェンダーフリーの考えについて理解する。」という目標については、内容的に難しかったようで「あまりできなかった」と答えた生徒の割合が約20%～約30%となっており、もっと生徒にわかりやすい資料を作るなどの工夫・改善の必要があると考えられる。

(4) 授業の感想

普段の授業より好評で、肯定的にとらえ感想を書いてくれた生徒がほとんどであった。多くの生徒がこの授業で男女差別のことについて考えられたこと、性別役割分業の弊害、ジェンダーにとらわれず自分らしく生きることが大切であること、自分もジェンダーにとらわれた言動を行っていたかもしれないという自己の振り返りなどについて記述していた。この授業のねらいとして「ジェンダーにもとづいて区分された社会の中で生徒に植え付けられた『常識』に揺さぶりをかけ、固定的な性役割にとらわれずに『自分らしく』生きることの意義、今まで当然とされていたものに疑問をもち、変えるべきものは変えていくことの意義に気付けるような授業を実践すること」があるが、特に次の2人の感想からはねらいに迫れたことがうかがえる。

名簿のことを例にとっても、私が知らない間に、身についてしまった男女のことがいろいろあることに気がつきました。せっかく気づけたのだから、私なりに考え方を考えていこうと思います。プリントの「男女の特性と差別との関係」は何度読んでも難しく、はっきりした答えを見つけることができなかつたけれど、このようなことも考えていかなければいけない課題だなあとと思います。ビデオを見て、田嶋さんの考えにいろいろ納得しました。男女のことを深く考えることができうれしく思います。（平成10年度坂西中3年生女子）

昔からみるとよくなってきたが、世界で比べるとやはり男女差別は残っているのだと実感した。例えば男女別の名簿など差別にはつながらないと思っていたが、そういう小さなことが大事なんだと思った。女、男ということにしばられずに、だれでもどんな職業につけるという可能性もてる世の中にしていきたい。そして、「男に生まれてこなければ」とか「女に生まれてこなければ」と思うことのないようにしたい。（平成11年度坂西中1年生女子）

以下、他に生徒の感想をいくつか紹介したい。

今まで、男女差別とかあまり考えたことはなかった。はっきり言うと、どうでもいいと思っていた。けれど、やっぱり、男はやってもいいけど、女はだめと言われることはつらいことだから、自分でも、私の個性をアピールするべきだと思う。私たちが大人になる前にこのことを考えられてよかったと思う。（平成10年度坂西中3年生女子）

出席番号は差別ではないと思っていたけれど、そんな小さなことから直さなければいけないと分かった。自分も自分でわからないうちに男と女を区別してしまっていたのでショック。(平成10年度坂西中3年生男子)

自分が自然と一方通行の考え方になってしまっていたと思い悲しくなった。男女の平等という問題そのものが地球上から消えてほしい。もう一度、男女ということを考え直していかなければならないと思った。(平成10年度坂西中3年生男子)

男女ともにお互いのことを知り、相手の存在について、その存在の大切さを知っておくことが大切だと思います。また、男女平等に世界がなった時それは人々にとって一番幸せで一番暮らしやすい環境だと思います。(平成11年度坂西中1年生女子)

僕はこの授業をして男女差別はいけないと思いました。男だから、女だからと決めつけるようにするといつか悪いことになってしまうと思います。僕もそういわれたりしたことがあるけれど、その時はなんだかすごく嫌な気持ちになりました。それに社会に出れば、男は仕事、女は家事、そんなんじゃ家庭を支えられないような気がします。男女いっしょに子育て、料理や仕事をやっていけばいいと思います。(平成11年度坂西中1年生男子)

こんなに男女差別が深刻だと思わなかった。自分も差別意識をなくして区別しないで、周りでまちがっていたら「ここは差別じゃないんですか」ときけるような人になっていきたい。(平成11年度坂西中1年生男子)

ビデオで女の職業ですし屋、大工、映画監督、宅配ドライバーなど私は最初は「おかしい」と思っていたけど、ビデオを見終わって「日本は変だなー。」と思った。男でも保育士などを目指している人がいる。最初は男は仕事、女は家庭という方にどちらかという賛成だったけど、ビデオを見てから、男は仕事、女は家庭に関係なく自分らしく生きていけばいいんだなーと思うようになった。「わがまま」の意味がわかった。私も女だから今まで女らしく過ごしてきたけど、関係ないんだー。私も自分らしく大きな1本の木として生きていこうと思った。この勉強をしてとってもよかった。田嶋さんが「自分を育てた」って言っていてそれが印象に残った。(平成12年度毛野中1年生女子)

小さなことがどんどん差別意識を育ててしまうということがわかりました。はじめは男女混合名簿でも男女別でもいいと思っていましたが、こういうことが差別につながっていくということがわかり、今のような男女混合名簿になってよかったんだと思いました。まだ、日本は社会でも家庭でも男女平等とはいえませんが、絶対男女平等といえる国になってほしいと思いました。(平成12年度毛野中1年生女子)

男女差別のことは難しかった。僕も男らしく、女らしくにしまられないように生きたい。僕たちは今まで看護婦といったら女とかそういうことを決めつけていたが、今度からはそういうのを決めつけずに生きていきたいと思った。(平成12年度毛野中1年生男子)

僕は男女平等の授業でみんな自分らしく生きることが大切だと思いました。みんな差別意識をなくし、平等に生きていくことが社会生活を生きていくうえで大切だと思いました。僕も自分らしく生きていこうと思いました。(平成12年度毛野中1年生男子)

(5) 平成12年度毛野中学校1年生の3年間の観察

① クラスの雰囲気

3年間どのクラスも男女の仲はよくお互いに協力し合えた学年だった。男女混合名簿になってから教師も性別に分ける必要のない場面においても敢えて区分するということが減ってきたようである。例えば男女別の平均点を出して生徒に知らせるなどの性別により区分をされる機会が減ったせいかな生徒も性別による区分の意識が男女別名簿しか経験していない上の学年より薄いようだった。

② 人権作文

本校では夏休み前に学活や道徳の時間を利用して全校生徒が人権作文を書くことになっている。全国人権作文コンテスト栃木県大会の応募作品の内容別内訳調べの11の分類に従って調査したところ、女性問題をテーマにしたもの（実際は男女差別の問題を取り扱ったもの）の数は次の表にあるように平成12年度毛野中学校1年生が1年生だったとき（まだジェンダーをテーマにした授業を行う前）は学校全体でこのテーマを選択した生徒数は3名だったのに、平成13年度当該学年が2年生だったときは1年0名、2年18名、3年1名、平成14年度当該学年が3年生だったときは1年2名、2年2名、3年22名、とジェンダーをテーマにした授業を行っていない学年と比べ、女性問題をテーマにした人権作文を書いた生徒の数が圧倒に多くなっている。このことからジェンダーをテーマにした授業が生徒の関心を喚起しその後も関心を持ち続けさせることができたと考えられる。

人権作文内容別内訳調べ

作品の内容	年	学年・男女内訳								合計	総計
		1年		2年		3年		合計			
		男	女	男	女	男	女	男	女		
1 社会の国際化問題 に題した作品	H12年										14
	H13年	6	5	12	3	3	2	21	10	31	
	H14年	1	5	1	2	1	1	3	8	11	
2 いじめをテーマ とした作品	H12年										103
	H13年	30	26	27	21	23	20	80	67	147	
	H14年	20	26	22	22	8	9	50	57	107	
3 障害者問題 をテーマとした 作品	H12年										122
	H13年	7	17	11	23	4	24	22	64	86	
	H14年	21	27	13	16	14	16	48	59	107	
4 同和問題を テーマとした 作品	H12年										9
	H13年	0	0	1	0	0	0	1	0	1	
	H14年	0	0	4	1	2	0	6	1	7	
5 高齢者を テーマとした 作品	H12年										21
	H13年	1	0	3	6	5	6	9	12	21	
	H14年	1	1	6	7	2	5	9	13	22	
6 女性問題を テーマとした 作品	H12年										3
	H13年	0	0	6	12	0	1	3	13	16	
	H14年	1	1	1	1	6	15	8	17	25	
7 差別問題と 一般問題を テーマとした 作品	H12年										15
	H13年	19	14	2	1	5	10	26	25	51	
	H14年	6	2	9	9	3	4	18	15	33	
8 戦争や平和 をテーマとした 作品	H12年										39
	H13年	0	0	0	0	11	3	11	3	14	
	H14年	1	3	13	13	17	12	31	28	59	
9 環境問題を テーマとした 作品	H12年										104
	H13年	1	0	0	0	12	3	13	3	16	
	H14年	13	2	9	1	7	7	29	10	39	
10 プライバシー 問題をテーマ とした作品	H12年										3
	H13年	0	0	0	0	1	1	1	1	2	
	H14年	0	0	0	2	1	0	1	2	3	
11 その他人権 の問題を テーマとした 作品	H12年										6
	H13年	17	19	3	9	6	8	26	36	62	
	H14年	0	0	4	5	4	6	8	11	19	
合計	H12年										439
	H13年	81	81	65	75	70	78	216	234	450	
	H14年	64	67	82	79	65	75	211	221	432	
総計										1321	

③ 総合学習用のファイルの色の問題

13年度に総合学習のファイルを生徒に配布するとき、学年主任が男子には青、女子には赤のファイルを用意した。そのことを聞いたときに、性別で色を決めて配布するのはどうかと申し入れたが、今回はもう購入してしまったので生徒に男女別に色で分けて配布してほしいとのことだった。生徒に配布したところ、「どうして男女で色を分けるのか」「僕は赤がいいので青がいいという女子と交換してよいか」などの不満、訴えが多かった。これに対し、「みんなの言う通りだと思うが、今回はこれで我慢してほしいとのことである。どうしても取り替えたい場合は、その旨を学年主任に伝え、学年主任がよいといえば取り替えてかまわない。授業でやったように、先生達はずっと性別による区分、ジェンダーにとらわれた環境の中で育ってきたため、そこからなかなか抜け出せないでいる。今回のように、みんながおかしいと思ったことは声に出して言ってほしい。そうして先生や大人達に気づかせてほしい。」という主旨の話をした。

④ 集会での座り方

14年度の3年生を対象とした集会である教師が生徒の座り方について次のような注意を行った。「女子であぐらをかいている人がいますが、おかしいので足を横にやるようなおしなさい。」男子にもあぐらをかいている生徒はいたが、男子には注意せずそのままだった。男女とも体育着で床に座って話を聞いていたので、その注意におかしいと思った女子生徒がすぐに反応し、後ろにいた筆者に対して小声で「先生おかしくないですか？男子だけあぐらでいいのですか？」と言ってきた。「そうだよね。話を聞く態度としてあぐらが失礼なら全体育育座りにすべきだね。」と答えた。ジェンダーの問題だけではなく実際横座りは健康上の問題（保健ニュースに関連記事掲載）もあり、この教師の注意はまさにジェンダーにとらわれたものであると思われる。生徒が直接本人に対してでなくてもおかしいと思ったことを声に出していることは1年生のときの授業が生きていると考えられる。

⑤ 社会科の授業についてのアンケートから

3年の最後の授業のときに社会科の授業についてのアンケートで、「3年間の社会科の授業で人権について扱ったものの中で（1）一番印象に残っていること、（2）勉強になったと思うことは何ですか。」という質問に対して男女差別は（1）ではユダヤ人虐殺に次いで2位で18.6%、（2）では、1位で21.7%であった。（回答数 69名：2、3年では2クラスだけを担当していたため）ジェンダーをテーマにした授業実践から約2年後のアンケート調査での結果だったので、筆者が行った授業の中ではインパクトのある授業だったようであるし、影響を与えることができた授業だったということが出来る。

4 成果と課題

特に、生徒の自己評価、その後の生徒の様子を観察から、関心・意欲・態度の目標である「今まで、当たり前と思われてきたことに対して、疑問を持ちよく考えてみることの大切さに気づく。」「些細な（小さな）ことの積み重ねが差別意識を育てていく危険性があることに気づく。」「男女平等の問題について関心を持つ。」においてほぼねらいが達成できたと考える。名簿問題については、授業後においても差別につながると答えた生徒の割合が多数派とならなかったことから、些細な問題ではないことを十分認識させられなかったと思われる。また、「固定的な性役割にとらわれずに自分らしく生きることの大切さ」についてたくさんの生徒

が性別役割分業反対理由に挙げ、授業の感想でも言及していたことは本授業の成果として挙げられる。

課題としては次のようなことが挙げられる。男子優先の男女別の名簿は男女差別につながらないと答えたH10年度坂西中3年生の理由の記述に「このアンケートの選択肢もア 男、イ 女と、男の方が先になっているように、男の方が先というレッテルがはられているから皆気にしないと思う。」というものがあつた。このような、現状をただ受け入れているだけの生徒にどのように当たり前だと思われてきたことのなかに差別の芽があるか気付かせていったらよいか一つの課題である。また、性別役割分業について、どちらかといえば賛成を支持したH11年度坂西中1年生の理由の記述に「今の大人の人たちは男女平等について学習していないから言っても理解してくれないし、これが当たり前のような生活になっている気がする。」というものがあつた。現状を変えていくことへの諦めを表現していた。自身が現状に疑問を感じているなら、こうした生徒には諦めずまず声を出していくことから始め、変えていこうという姿勢をもてるよう働きかけるようにしていきたい。

知識・理解の目標である「女子差別撤廃条約の趣旨と1985年にこの条約を結んだ後の日本の動きについておおまかに理解する。」「ジェンダーフリーの考えについて理解する。」はよくわからなかったと自己評価を行った生徒の割合が20%前後から30%前後だったので、工夫・改善を行う必要がある。今回のジェンダーをテーマにした授業は男子優先の男女別名簿から男女混合名簿へと変更される過渡期にいた生徒を対象にした授業だったので、名簿問題も取り上げたが今後ジェンダーをテーマにした授業を展開するにあたっては適切でタイムリーな題材を取り上げられるよう常にアンテナを高くしていることが課題として挙げられる。

次にジェンダーフリーの教育を進めていくための教師側の課題を挙げる。男子の方が女子よりも自分の性別に肯定的であること、男子優先の男女別名簿と「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業について女子の方が男子よりも反対する割合が高いことから、現状では女性の方が被差別者として不利益を被っている場面が多いという認識が生徒のなかにもあつた。ジェンダーにもとづいて区分された社会をジェンダーフリーの社会に変え、自分らしく生きられるようにするためにはどうしたらよいか。まず、慣れ、慣らされてしまうことが問題である。今まで当然とされていたものに疑問をもち、おかしいと思ったことは声に出し、変えるべきものは変えていくこと。生徒にそれを実行していく態度を身に付けさせていくことが大切である。

名簿について、生徒自身もアンケートで答えているように、男子優先の男女別名簿は無意識のうちに男子優先という差別意識を植え付けてしまう。また、男女別名簿は不必要に性別に区分する機会をもたらし、男女の違いを強調し意識させ、ジェンダーに縛られて生きることを当然とすることにもつながっていく。区別と差別は違うという意見もあるが、このように区別が差別につながっていく危険性もある。たかが名簿という意識の生徒も教師もいるが、差別を生み出す種は些細なことと思われることの中にある。それから摘み取っていく必要がある。そのことへの気付きが重要なのである。このことは、男女差別に限らず、差別問題一般に通じるものがある。不必要な区別がやがて差別へと繋がっていく、そこが問題なのである。

我々教師はジェンダーにもとづいて区分された社会で生徒より長く生きてきた分、無意識のうちにジェンダーにとらわれた言動をとっていることがある。例えば、学年で選出された学級長が男子ばかりになっても何も言わないのに、女子ばかりになると「この学年の男子はだらしない」などの発言が教師から出るなど、無意識にジェンダーにとらわれた言動が表出する。教師には、そのことを自覚し生徒に指摘されてもそれを受け入れる寛容さ、自らの差別意識に気付き検証しそれを解消していこうとする謙虚な態度が求められる。

人間なら誰でも何らかの対象に偏見や差別意識はもっているものである。それに気付く解消しようと努力する態度が大切なのだが、なかには自分は偏見や差別意識はもっていないと信じ主張している教師もいる。こういった教師に気付かせ、意識や態度を変えていくにはジェンダーをテーマにした教師のための段階をふまえたワークショップなどの教師教育が必要である。

おわりに

最近、ジェンダーフリーの教育に対する反動的な動きがあるが、ジェンダーフリーというのは、「何でも男女同じにしなければならない」ということではないし、一般的に言われる、「女らしいこと、男らしいことが悪い」ということでもない。男女には身体的な違いもあるし、女らしいこと、男らしいことがその人らしさであったなら問題はない。人の行動や生き方を社会的・文化的につくられた性差別、つまり、ジェンダーに決めつけられないことを、ジェンダーフリーと言うのである。ジェンダーフリーの教育はすなわち、個性の尊重、その人自身の尊重へとつながっていく。まさしく、人権尊重の教育なのである。それを取り違え、人権教育のための国連10年行動計画を受けて策定された、「人権教育のための国連10年」に関する国内行動計画で推進してきたものを逆行させてはならないと思う。そのためにも、教師一人一人の人権意識を磨く努力が必要なのである。

前述した集会での座り方で女子だけに注意した教師がまた、同じ様な機会にあぐらをかいていたことに対して女子だけに注意を行ったので、その後、そっと「女子だけに注意するのはおかしいと、以前生徒からの訴えがあったこと、話を聞くときにあぐらをかくのは男女関係なく相手に対して失礼ではないか」との話を話してみた。筆者としても先輩教師に意見を言うのは少し勇気がいったが、前回生徒がせっかく声に出してくれたことを、この教師に伝えられなかったので、今回は伝えることにした。すると、その教師は筆者の言ったことをすぐに受け入れてくれ、男子も女子も話をしてくださる方に失礼だからあぐらをかくのをやめるよう注意を改めてくれた。その後、私が言ったことに気分を害することなく「頭ではわかっているけど、今までずっとそういう環境で生きてきちゃったからダメなんだよね。」と前向きに話してくれた。筆者はこの先輩教師の対応に感動し、嬉しくなった。我々教師は、この教師のような、しなやかさ、寛容さをもっていれば、お互いの感覚を磨き合え、生徒の考えもしっかり受け止め、お互いを尊重し合えるような環境を作っていけるのではないかと思う。

参考文献

- 松井真知子「ジェンダーと教育」(共生の教育)(岩波書店、1998)
- 富岡恵美子・吉岡睦子編「日本の女性と人権」(明石書店、1995)
- 木村涼子「学校文化とジェンダー」(勁草書房、1999)

評

男女共に各人の生き方、能力、適性を考え、主体的に進路を選択できる社会を築くことの重要性が指摘されている今日、21世紀という激しく変化する時代を生きる生徒たちに、男女の平等や相互の理解・協力について適切に指導することは大切です。

本研究論文は、ジェンダーにもとづいて区別された社会の中で生徒に植え付けられた「常識」に揺さぶりをかけ、固定的な性別役割にとらわれずに「自分らしく」生きることの意義、今まで当然とされていたものに疑問をもち、変えるべきものは変えていくことの意義に気付けるよう授業実践を通してまとめられています。

生徒のジェンダーに対する認識を深めるため、「女だから、男だから、こうあるべき。」との考えを植え付けられて育ってきた生徒に、男女別名簿から男女混合名簿に変更することを話題として提示し、今まで当然とされていたものに疑問をもたせ、考えるきっかけとしました。

この授業により生徒は、男女差別、性別役割分業の弊害、ジェンダーにとらわれず自分らしく生きることの大切さを考え、自分もジェンダーにとらわれた言動を行っていたかもしれないという自己を振り返っています。ジェンダーをテーマにした人権作文が増え、学校生活の中でも、ファイルの色の問題、集会での座り方の問題等、疑問をもつ生徒が増えてきました。このことは、ジェンダーをテーマにした本授業の実践が、生徒にジェンダーにとらわれずに自分らしく生きられる社会をつくっていく力を育てるうえで効果的な一方法であることを示しているといえます。

また、ジェンダーの授業を展開するにあたり、教材研究を深め、ねらいの明確化と指導計画の作成、多様な資料の提示等十分な準備がなされています。授業で育てたい力を考えた意図的な授業構想があるからこそ、生徒自身を振りかえらせる意味のある授業になっています。さらに、生徒にアンケートや感想を書かせ、認識の深まりを把握し、次の授業に生かしていることも参考になります。

今後とも、この実践を工夫改善しながら継続し、その成果を各学校へ発信していただくことを期待しております。